

群 教 七	G11 - 02
	平 19.239集

小学校・中学校・高等学校における キャリア教育の推進に関する研究

- 理論から実践に至る道筋を明らかにすることを通して -

長期研修 研修員 森田 満
阿部 誠二
里吉 竜一

《研究の概要》

本研究は、小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育を推進するため、キャリア教育の理論から各学校における実践に至る道筋を明らかにするものである。具体的には、キャリア教育啓発資料を作成し、それを活用した校内研修により理論の理解を促した後、国立教育政策研究所から示された資料の活用を通し、小学校ではキャリア教育全体計画の作成、中学校では特別活動の授業、高等学校では教科「情報」の授業を実践した。

キーワード 【進路指導 キャリア教育 校内研修 清掃活動 学級活動 教科「情報」】

研究の背景とねらい

1 主題設定の理由

近年の産業・経済の構造的変化や雇用の多様化等を背景に、若者の精神的・社会的な自立の遅れ、高い早期離職率、フリーターやニートと呼ばれる若者の存在等が社会問題になっている。

こうした状況下、平成18年11月、文部科学省から「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引（以下、手引）」が示され、小学校・中学校・高等学校を通じた計画的、組織的かつ系統的な取組の必要性が強調された。また、同年12月には教育基本法が改正され、第2条「教育の目標」の中に、キャリア教育のねらいと重なる内容が明記されるなど、その推進が強く求められている。

しかし、各学校の現状を見ると、キャリア教育の必要性が十分には理解されておらず、校内組織編成や教育課程の見直し及び体験活動等の充実が実現されているとは言えない状況である。昨年度、本センターが実施した県内すべての公立中学校及び高等学校対象のアンケートからも、キャリア教育に関する理解の不足、実施上の苦労や悩み、あるいは否定的な意見がうかがえる。一方、キャリア教育の先進的な取組の報告が多数なされているものの、それらが各学校の実践に直接的に結び付かないことも見て取れる。これは、キャリア教育の取組が各学校の実態に応じた内容でなければ実

践には結び付かないことの表れであると考えた。

そこで、キャリア教育について正しく理解した上での各学校における実践への結び付け方、すなわち、理論から実践に至る道筋を明らかにする研究が必要であると考え、本主題を設定した。

2 昨年度の調査研究との関連

昨年度は、各学校におけるキャリア教育導入期の指導の在り方に関する研究を行い、成果物として、「ぐんまのキャリア教育実践マニュアル（以下、実践マニュアル）」を開発した。実践マニュアルは、キャリア教育についての正しい理解を促す「理論編」、中学校及び高等学校における実践にすぐ活用できる資料等を収めた「中学校編」「高等学校編」及び「参考リンク集」の4部から成る。県内すべての公立中学校及び高等学校に配付し、本センターの各種研修講座で紹介するなど、活用を促してはいるが、なかなか実践には結び付かないのが現状である。

以上を踏まえ、今年度は、各学校におけるキャリア教育の実践に主眼を置く研究を考えた。

3 研究のねらい

小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育を推進するため、協力校の実態に応じたキャリア教育の実践を通し、理論から実践に至る道筋を明らかにする。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 小学校・中学校・高等学校におけるキャリア教育
手引ではキャリア教育の範囲を、『キャリア発達には、児童生徒が行う全ての学習活動等が影響するため、キャリア教育は、学校の全ての教育活動を通して推進されなければならない』と規定し、小学校・中学校・高等学校を通じた計画的、組織的かつ系統的な推進を求めている。しかし、現実的には、小学校から高等学校までの12年間の指導に同じ教員集団が携わることがほとんどない。

そこで、各学校段階での指導に当たる教員が、当該校種のみをキャリア教育の対象として考えるのではなく、12年間を視野に入れた一貫する取組としてとらえることが重要であると考えた。

(2) 各学校の実態に応じたキャリア教育

先行研究では、「キャリア教育の推進には、各学校の実態に応じ、できるところから始めていくことが重要である」と強調されている。

また、「各学校におけるこれまでの取組をキャリア教育の視点、つまり、児童生徒のキャリア発達を支援するという視点で見直すことが重要である」とも手引等で指摘されている。

以上の2点を、各学校の実態に応じたキャリア教育の基本的な考え方としてとらえた。

2 キャリア教育の理論から各学校における実践に至る道筋

理論から実践に至る道筋を図1のように二段階に分けて考えた。

第一段階は、キャリア教育の理論に関する共通理解を促す場面ととらえた。具体的な手だてとし

て校内研修を設定し、活用する資料は、実践マニュアル「理論編」を基に作成することを考えた。

第二段階は、共通理解を実践に結び付ける場面ととらえた。その際、平成14年に国立教育政策研究所から示された「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」(以下、学習プログラム例、資料1参照)を活用することとした。

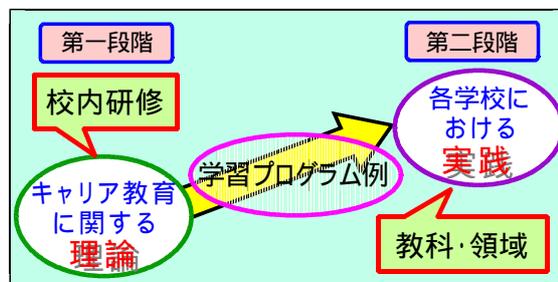


図1 キャリア教育の理論から実践に至る道筋

3 学習プログラム例とその活用について

学習プログラム例は、各学校段階において育成が期待される能力・態度が、どの程度身に付いているかの見取図として作成された(図2)。各学校段階におけるキャリア発達課題を横軸に、キャリア発達にかかわる4つの能力を領域として設定し、縦軸に配置している。さらに、この4つの領域を、それぞれ2つの下位能力に分け、8つの能力として示している。本研究報告書では、以上の4つの領域と8つの下位能力を「4領域8能力」と表記した(表1)。

表1 4領域8能力

4領域	8能力	
人間関係形成能力	自他の理解能力	コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力	職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力	計画実行能力
意思決定能力	選択能力	課題解決能力

		小 学 校			
		低 学 年	中 学 年	高 学 年	
職業的(進路)発達段階		進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期			
職業的(進路)発達課題(小・高等学校段階) 各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。		<ul style="list-style-type: none"> 自己及び他者への積極的関心の形成・発展 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 			
職業的(進路)発達にかかわる諸能力		職業的(進路)発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度			
領域	領域説明	能力説明			
人間関係形成能力	<ul style="list-style-type: none"> 他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々と コミュニケーションを図り協力・共同してものごとに取り組み 	<ul style="list-style-type: none"> 【自他の理解能力】自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力 【コミュニケーション能力】多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 友達と仲良く遊び、助け合う。 お世話になった人などに感謝し親切にする。 あいさつや返事をする。 「ありがとう、や「ごめんなさい」を言う。 自分の考えをみんなの前で話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよいところを見つける。 友達の良いところを認め、励まし合う。 自分の生活を支えている人に感謝する。 自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 友達の気持ちや考えを理解しようとする。 友達と協力して、学習や活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の長所や短所に気付き、自分らしさを發揮する。 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。 思いやりの気持ちを持ち、相手の立場になって考え行動しようとする。 異なる年齢集団の活動に積極的に参加し、役割と責任を果たそうとする。

図2 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)から一部抜粋

なお、学習プログラム例において『職業的（進路）発達』と表記される内容が、手引では、『キャリア発達』と表記されているので、本研究では両者を同内容にとらえたことを確認しておく。

以下に活用理由及び活用上の注意を記す。

(1) 活用理由

一つめは、小学校から高等学校までの12年間をひとまとまりにとらえ、各学校段階におけるキャリア発達課題を一覧できる体裁をとっていることである。教員各々が、この学習プログラム例を俯瞰的にとらえることにより、キャリア教育に関する共通言語が認識されるとともに、各学校段階におけるキャリア発達課題の達成を目標とした実践がなされ、計画的、組織的かつ系統的な取組が期待できると考えた。

二つめは、育成が期待される能力・態度が、「...分かる。」「...する。」などの知識・理解や行為のレベルで、具体的かつ平易な表現で提案されており、各学校におけるキャリア教育の目標設定等に活用しやすいと考えられることである。これらを参考に、各学校の実態を踏まえた上で、育成が期待される能力・態度を明らかにしたキャリア教育の推進に結び付くことが期待できる。

(2) 活用上の注意

一つめは、学習プログラム例にある育成が期待される具体的な能力・態度は、あくまで参考例であるということである。これらは、各学校における実践の際の参考として活用するための資料であることを確認しておく必要があると考える。

二つめは、一つの活動（1単位時間の授業、一つの学校行事等）で、縦軸に配置された4領域8能力のすべてを身に付けさせる計画を立てる必要はないということである。キャリア教育の範囲は、各学校における全教育活動であり、その中でバランス良く各能力の育成を目指せばよいのであって、取組によって育成を目指す能力数には差が生じることを前提として、実践例を示すものとした。

研究の方法

1 校内研修の実施

キャリア教育啓発資料を作成し、校内研修を実施した（表2）。終了後にアンケートを行い、有効性を検証した。（アンケート結果については資料2参照）

表2 キャリア教育に関する理論の共通理解を促す校内研修

対象	実施者	期 日	検 証 の 視 点
小学校 教員17名	森田 満	平成19年7月2日(月)	各学校段階に対応するキャリア教育啓発資料を使用したキャリア教育に関する校内研修を実施したことは、キャリア教育の理論に関する共通理解を促し、実践への意欲を高めることに有効であったか。
中学校 教員13名	阿部 誠二	平成19年8月7日(火)	
高等学校 教員35名	里吉 竜一	平成19年10月16日(火)	

2 各学校段階における実践

学習プログラム例を活用しながら協力校の実態に応じた指導計画を作成し、実践した（表3）。

終了後に教員及び生徒に対しアンケートを行い、有効性を検証した。（アンケート結果については資料2参照）

表3 各学校段階における実践

この授業は、同じ学習指導案及び資料を使用し、他の指導者が実践。

対象	実施者	期 日	形態	実践内容【領域等】	検 証 の 視 点
小学校 教員17名	森田 満	平成19年11月8日(木)	校内研修	清掃活動を重点としたキャリア教育全体計画作成【領域/特別活動/学校行事/勤労生産・奉仕活動】	全体計画作成時において、校内研修を行うことは、キャリア教育推進の共通理解を得るのに有効であったか。
中学校 生徒70名	阿部 誠二	平成19年11月13日(火)	授業	進路指導（2年）【領域/特別活動/学級活動】	学級活動における進路指導の授業において、キャリア教育の視点で見直しを加えたことは、キャリア発達を支援することに有効であったか。
		平成19年11月15日(木)	授業		
高等学校 生徒21名	里吉 竜一	平成19年11月9日(金)	授業	教科「情報」（2・3年）【教科】	教科指導において、教科の視点とキャリア教育の視点を盛り込んだ学習指導案による実践は、教科の目標を達成するとともに、キャリア発達を支援することに有効であったか。

研究の展開

1 校内研修の実施

(1) 概要

以下の項目に各学校段階の実態に応じた内容を加え、キャリア教育啓発資料（資料3参照）を作成し、校内研修を実施した。研修終了後、アンケートを行った。

キャリア教育に関する用語の理解

「キャリア」「キャリア教育」「キャリア発達」等の用語についての理解を促した。

時代背景

「就職・就業をめぐる環境の激変について」と、「若者自身の資質等をめぐる課題及び学校から社会への移行をめぐる課題」について触れ、これらを背景にフリーターやニートの存在、早期離職者の増加といった問題が生じたことを確認した。

キャリア教育で育成が期待される能力・態度

文部科学省から示されたものとして「4領域8能力」、その他、経済産業省や厚生労働省から示された能力等を紹介した。

キャリア教育と進路指導との関係

これまでの進路指導と今後の意欲的な取組が望まれるキャリア教育について、共通点や相違点等を指摘しながら、両者の関係を明らかにした。

学習プログラム例

前述した学習プログラム例についての説明を加え、この活用を通し、実践へと結び付けることを確認した。

キャリア教育の進め方

文部科学省から示された進め方や学習プログラム例を参照し、「過去をふりかえる、未来を意識付ける、自分と社会を関係付ける」を主な活動ととらえ、今後の取組における指針として確認した。

(2) 結果と考察

アンケート結果（資料2参照）を見ると、学校段階にかかわらず、キャリア教育の理論についての理解が深まり、実践への意欲が高まったことが分かる。このことから、各学校段階に対応するキャリア教育啓発資料を使用した校内研修を実施することの有効性が検証された。

また、実践に向けての意識という点では、キャリア教育の実践例を示して欲しいとの意見が研修中の発言や自由記述からもうかがえ、実践の必要性が確認された。

2 各学校段階における実践

キャリア教育は各学校における全教育活動を通して推進されなければならない、という考え方を踏まえ、領域（小学校及び中学校）及び教科（高等学校）での実践を設定した。

小学校では、学校全体での取組における教員の意味統一を図る実践、中学校では、これまでの取組の中でもキャリア教育とのかかわりが深いと思われる内容をキャリア教育の視点で見直す実践、高等学校では、教科指導において生き方などに直接はかかわらないと思われる内容を扱う実践を取り上げ、当該校種以外でも活用できるよう配慮した。以下に実践への過程を詳述する。

(1) 小学校(学習プログラム例を活用した全体計画作成のための校内研修)

ア 校内研修の設定理由

キャリア教育の実践に当たり、「各学校の実態に応じてできるところから始めていく」という観点から協力校での実態・特色をキャリア教育の視点で見直した。その結果、これまで行ってきた「異学年班編成による清掃活動」（以下、清掃活動）をキャリア教育の重点目標にして取り組むことが、導入に無理がなく、かつ、キャリア発達にかかわる諸能力を効果的に伸長できると考えた（表4）。

表4 清掃活動とキャリア発達にかかわる諸能力との関連

清掃活動の内容・特徴	キャリア発達にかかわる諸能力
・縦割り異学年編成 ・メンバー交代制 ・複数担当者制	人間関係形成能力
・道具や方法の工夫 ・場所の特徴把握 ・回収業者との連携	情報活用能力 職業理解能力
・準備、後かたづけ ・反省会 ・班長体験	計画実行能力 役割把握能力
・仕事の選択、分担 ・協力、相談 ・責任感	選択能力 課題解決能力

清掃活動は学校全体で行う取組であるので、教員全員の意思統一が必要であると考え、校内研修の形態をとり、実践へ結び付けることとした。

なお、本研修では、研修員が「キャリア教育主任」という立場で準備や進行の役割を担当した。各学校での実践を考えると、キャリア教育の推進に中心的立場で携わる教員が必要だと思われるためである。

イ 校内研修の概要

実施した校内研修の概要を表5に記す。

表5 校内研修の概要

内容	プレゼンテーション及び協議
準備	研修資料、全体計画（案）
展開 【方法】	(ア) キャリア教育の理論について 【研修資料による説明】 (イ) 協力校での推進具体案の提示 【研修資料による説明】 (ウ) 全体計画作成 学習プログラム例の説明 【研修資料による説明】 学習プログラム例の活用 【各学年ごとの協議】 (I) 全体計画の確定 【全体での協議及び確認】

本研修では、教員集団の足並みをそろえた取組とするため、教員全員の協議による全体計画作成を行った。その過程で学習プログラム例を使うことにより、内容に関する理解を深めるとともに、その活用法への習熟も促すことを考えた。

ウ 事前準備

まず、前回の研修の復習を兼ねた内容の研修資料を作成した（資料4参照）。

次に、実践マニュアル「中学校編」に収録されたキャリア教育全体計画面案を参考に、協力校の案を作成した。

その中で清掃活動を全校重点目標として位置付け、発達段階に応じた具体的な活動を明記した。また、各学年ごとに話し合っ決めて決めることを意図して、「活動を通して育成が期待される能力・態度」を空欄にした（図3）。



エ 学習プログラム例を活用した校内研修（全体計画作成に向けて）

(ア) キャリア教育の理論について

定義等について再確認するとともに、改正された教育基本法の目標とキャリア教育とのかかわりについても触れた。手引にあるキャリア教育の推進手順例を示した。

(イ) 協力校での推進具体案の提示

全体計画（案）を用い、その中の「基本的な考え方」についてキャリアの定義に触れながら説明し、教員の具体的な活動、指導・支援体制について確認した。

次に、協力校の実態・特色をキャリア教育の視点で見直した結果から、清掃活動を「全校重点目標」として提案し、承認を得た。

図3 キャリア教育全体計画（案）

(ウ) 全体計画作成

学習プログラム例の説明

重点目標とした清掃活動を、計画的、組織的かつ系統的な取組とするために、学習プログラム例を活用して、育成が期待される能力・態度を設定することとした。ここで学習プログラム例活用の仕方を再度説明し、共通理解を図るとともに、特に、育成が期待される能力・態度のバランスに留意した。その際、上越教育大学の三村隆男准教授が示した構造図（図4）を参考とした。

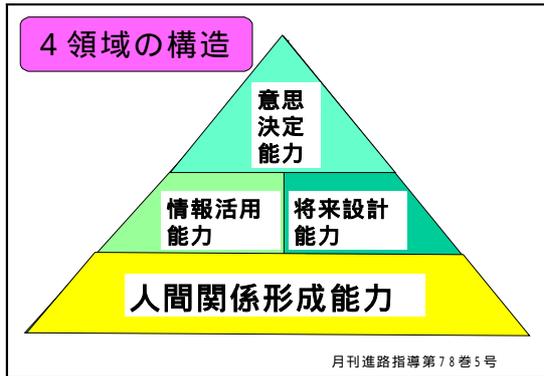


図4 4領域の構造

小学校段階は、社会的自立に向けたキャリア発達の基盤を形成する重要な時期であると考えられ

る。そこで、「人間関係形成能力」を重点的に育成するという共通認識をもつこととし、小学校の6年間では、低学年においては「人間関係形成能力」を、高学年になるにつれて「意思決定能力」を重点的に育成する意識をもつことを確認した。

学習プログラム例の活用

活動を通して育成が期待される能力・態度を決定するために、各学年ごとに話し合いをした。

日々接している児童の姿に発達課題を照らしたり、学習プログラム例に記されている能力・態度の具体的な表現を参考にしたりしながら、4領域8能力の中から、実施可能な数として二つの領域・能力を選択した。

これを清掃活動時に見られる子どもの姿として具体的かつわかりやすく表現し、活動を通して育成が期待される能力・態度とした。

(I) 全体計画の確定

設定した能力・態度を各学年ごとに発表し、全体の場で協議した。それぞれの内容や表現、諸能力のバランスに偏りが無いかなどを検討し、修正を加えて一覧表とした（図5）。

これにより全体計画が確定し、キャリア教育を意識した清掃活動が全教員に認識された。

全校重点目標		
【清掃活動を通して発達段階をふまえた勤労体験をすることによって、キャリア教育を推進する】		
学年	具体的な活動	活動を通して育成が期待される能力・態度
1年	先生や上級生の話を聞き、ぞうきんやほうきの使い方を身につける。	あいさつや返事をする。[コミュニケーション能力] ぞうじの準備や片づけをする。[計画実行能力]
2年	上級生の話を聞き、仕事の分担の大切さがわかる。	自分と友達のやりたいことの折り合いがつけられる。[自他の理解能力] 上級生のぞうじの仕方に興味・関心を持つ。[情報収集・探索能力]
3年	メンバーと協力して、時間内にぞうじが終わる。	互いの役割や役割分担の必要性がわかる。[役割把握・認識能力] 自分の役割に責任を持って最後までやり通す。[課題解決能力]
4年	班長を経験し、反省会の進め方を身につける。	メンバーのよいところを認め、励まし合う。[自他の理解能力] 班長としての責任を感じ、最後までやり通そうとする。[課題解決能力]
5年	ぞうじの方法や分担する場面で、下級生の面倒をみる。	下級生の立場に立って考え、行動する。[コミュニケーション能力] 仕事における役割の関連性や変化に気づく。[役割把握・認識能力]
6年	よりきれいにするために、ぞうじの仕方を工夫する。	体験したことと、生活や職業との関連を考える。[職業理解能力] よりよい方法を選んだり、悩んだときには相談したりする。[選択能力]

([]はキャリア発達に関わる能力・態度)

図5 全校重点目標

オ 結果と考察

学習プログラム例の活用の仕方については、17名の教員ほぼ全員が「わかった」「だいたいわかった」と回答した。学習プログラム例を活用した全体計画作成を通し、キャリア教育推進への理解が深まり、キャリア教育の具体的な姿が明らかになり、推進の見通しや意欲をもつことができたことが自由記述などから判断できる（表6）。

表6 自由記述

・全体計画があると見通せるのでよい。ぞうじに重点をおいたのは無理なくできると思われる。
・指導者がキャリア教育の視点を意識するだけでも、少しずつ指導が変わると思った。清掃の例は具体例として参考になった。

以上から、キャリア教育全体計画作成において、学習プログラム例を活用することは、キャリア教育の実践を促すのに有効であり、その際に校内研修を行ったことは、キャリア教育推進の共通理解を得るのに有効であったことが検証できた。

今回は清掃活動を重点目標としたが、各学校におけるこれまでの取組をキャリア教育の視点で見直すことによって、重点目標の設定等を通し推進への共通理解が図られた特色あるキャリア教育の展開が可能だと考える。小学校段階の例としては、集団登校、全校レクリエーション、園芸・栽培活動、給食指導などが挙げられる。

また、特定の教科や領域に重点を置く実践も考えられる。一例として、道徳教育を中心に据え、日常的な活動や教科、学校行事を相互に補完、深化させながらキャリア教育を推進していく形式の年間指導計画を考えてみた（資料5参照）。

(2) 中学校(学習プログラム例を活用して構想した領域における授業実践)

ア 学級活動における授業実践

学級活動での進路指導は、進路適性の吟味と進路情報の活用、望ましい職業観・勤労観の形成、将来設計を考える力を育成することなどをねらいとしている。これらをキャリア教育で育成が期待される能力・態度と照らし合わせると大きく重なりをもつことが見出される。将来の生き方を考える進路指導を、キャリア教育の視点で見直すという提案を示すことが、キャリア教育の理解と推進において効果的であると考え、学級活動における授業実践を行った。

対象学年については、自分の考えを柔軟に変化させ、新しいことにチャレンジしようとする課題の設定がしやすい2年生とした。3年生になって受験をひかえ、余裕のない中であわただしく取り組むことのないよう、2年生の段階からじっくりと時間をかけ、試行錯誤を繰り返しながら、継続して将来の進路計画を立案する能力の伸長を図ることを考えに入れた。

イ 学習プログラム例を活用した育成が期待される能力・態度の具体化

進路計画を立案する能力の伸長を図る授業において、育成が期待される能力を具体的に設定する際に学習プログラム例を活用した。

まず、4領域8能力の領域説明から進路計画を立案する能力に関連する表記を探すと、「将来の生き方」「自己の将来設計」に触れた記述が将来

設計能力の領域に見られる。授業のねらいに照らし、将来設計能力に含まれる二つの能力のうち、計画実行能力を育成する能力として焦点化した。さらに、計画実行能力に示された中学校段階で育成が期待される能力・態度に着目し、『進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する』をより具体的な目指すべき姿として想定した。このようにして、キャリア教育で育成が期待される能力・態度を具体的に設定するとともに、キャリア教育の視点からの授業のねらいと評価規準を作成し、これを基に授業を構想した。

ウ 年間指導計画の見直し

授業実践に当たり、キャリア教育の視点で協力校での進路指導年間計画を見直したところ、これまで3年生で指導していた「先輩の進んだ進路から学ぼう」の内容を2年生に組み替えることが、継続的な計画実行能力の伸長に有効であると考え（図6）、扱う学年の変更と授業実践の題材としての妥当性について検討を加えた。

	題材名	学習内容(ねらい)
第1時	2年生の立場と役割を考えよう (2年生になった自分)	・第2学年の学習や活動の内容や特色を理解し、中堅学年としての役割や学校生活の目的をつかむ。 ・様々な視点から1年間の過ごし方について考え、自分なりの判断で自分の進路についての目標と心構えを持つ。
第2時	学ぶこと・働くことの意義を考えよう (働くことについて考えよう)	・なぜ社会に出て働くのか、また職業につくのはなぜかを考え、職業観、勤労観について理解を深める。
第3時	学習計画の検討をしよう (学習環境づくり)	・中堅学年として学習に臨む姿勢、態度について、「学ぶ」ことの意義と役割を理解し、将来に向けて学び続ける意欲を持つ。
第4時	自分の特徴を知ろう (職業と適性を調べよう)	・将来、職業人、社会人として積極的に社会にかかわるための基礎となる職業観・勤労観をはぐくむ。
第5時	充実した学校生活にしよう	・学校内外における様々な集団の中で、自分の行動の仕方や生き方について考えさせ、望ましい人間関係を確立していく。
第6時	自分を見つめよう (夢を実現するために)	・夢を実現するにはどのような努力が必要かを考えるとともに、責任と責任で進路を選択し、その実現に向けて自分自身で準備する姿勢をはぐくむ。
第7時	上級学校を調べよう	・地域にある上級学校を自分の手で調べ、上級学校のしくみとその内容を把握し、自分自身の進路選択の大切な情報として生かすことができるようにする。
第8時	進路計画の再検討をしよう	・第2学年の最終学年を迎え、今まで学習してきた内容や収集した進路情報などに、さまざまな視点から進路計画を作成していく。
第9時	2年生を振り返ろう	・これまでの1年を振り返り、自己の持つ適性の正しい理解と2年生で身に付けた自分の良さは何かを考え、3年生での生活に活かそうとしていく。
第10時	進級への心構えをもとう	・最上級生として自覚をもとうとするとともに、1年後には自分自身で進路決定をする立場となることへの心の準備を行う。

先輩の進んだ進路から学ぼう	・先輩がこれまでどのような視点で自分の進路を考え、計画・実行してきたかを資料から読み取り、今後、自分の進路計画を立てる際に有効に情報を役立てる。
---------------	--

図6 2年生 進路指導 年間指導計画

検討に当たり、従来3年生で指導してきた内容も含めて、2年生における進路指導の年間指導計画を4領域8能力と照らし合わせ、相互の関連性を調べながら整理し一覧表にした。その際、進路指導と関連性の深い指導内容を含む道徳や総合的な学習の時間、学校行事（体験活動）等も考慮に入れ、同一の表に組み入れた（図7）。併せて、4領域8能力を各能力ごとに分類した表も作成し

（資料6参照）、これらを基に計画実行能力における系統を確認した。その結果、自分の将来を考えようとする態度を継続的に育成していくことを考えて、従来3年生で指導してきた「先輩の進んだ進路から学ぼう」を2年生の3学期に指導する「進路計画の再検討」の前に組み替えることは、指導内容の流れから考えても、妥当であろうと判断した。

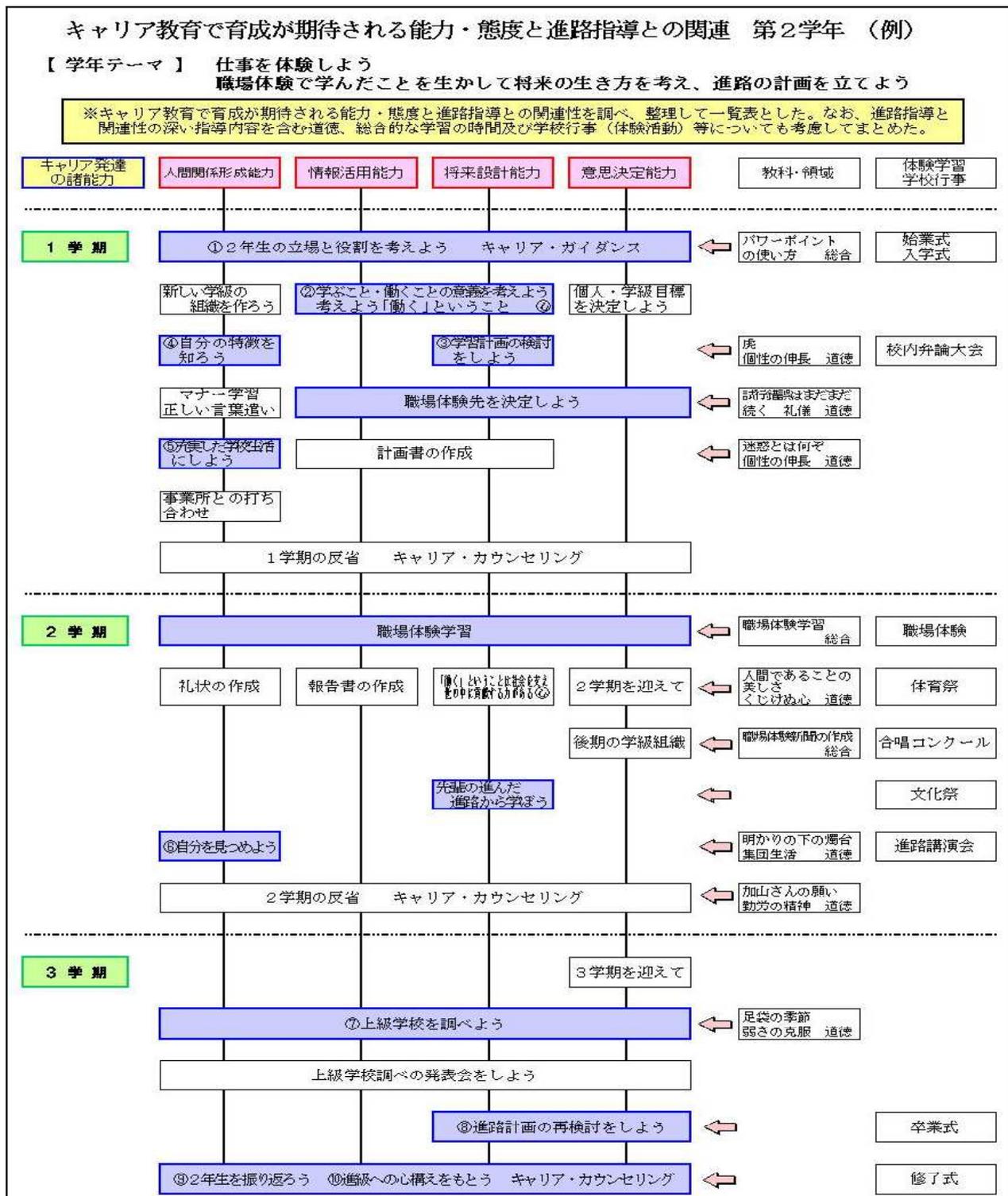


図7 キャリア教育で育成が期待される能力・態度と進路指導との関連 第2学年

エ 授業の概要

作成した学習指導案（資料7参照）を基に実施した授業の概要を表7に記す。

表7 授業の概要

領域	特別活動
内容	学級活動・進路指導
題材	先輩の進んだ進路から学ぼう
ねらい	先輩の進路決定時及び卒業後の考え方や同級生の進路に対する考え方から得た情報を基に、様々な視点から自己分析を行い、自らの進路選択の傾向をつかんだ上で、見通しをもった進路計画を作成しようとする。
対象生徒	70名（2年生2学級）

なお、研修員と他の指導者が同一の学習指導案及び資料を使用し、異なる学級において授業を行い、それぞれのアンケート結果等から検証することとした。

オ 結果と考察

(ア) 研修員による授業実践

参観した8名の教員全員が、学習指導案と授業展開について、今後のキャリア教育を実践する上で参考になったと感じるとともに、授業のねらいとして設定した計画実行能力の伸長が達成されていたと回答した。この結果から、学習プログラム例を活用して焦点化したねらいが達成され、キャリア教育実践への方向性の確認と意欲を高める効果があったことが検証された。表8に自由記述の主なものを記す。

表8 自由記述

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・進路について、漠然と考えている生徒にとっては、確実に方向付けがなされた授業であったと思う。・子どもたちが進路について真剣に考えるきっかけになる授業だった。客観的な資料をもとに情報が子どもたちに伝わったと思う。 |
|--|

また、生徒を対象としたアンケートからも、これまで3年生で指導してきた内容を2年生で扱った今回の授業において、自分の将来を考えようとする態度を育成できたと考える。これにより、キャリア教育の視点で指導時期を見直した進路指導の授業実践が、計画実行能力の育成に有効であったことが検証された。

(イ) 他の指導者による授業実践

他の指導者が、同一の学習指導案を使用して授

業を実践した。生徒を対象としたアンケートの自由記述には、進路について現実を基に前向きに考えていこうと思うとの感想が記され、自らの進路に対する考えが深まったことが確認できた（表9）。結果として研修員の実践とほぼ同一のものが得られたことから、キャリア教育の視点で見直した指導計画の有効性を検証することができた。

表9 自由記述

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・自分の得意なことをたくさん見つけて、それを将来に伸ばしていきたいと思った。・その高校で自分が満足できるのかを調べたり考えたりして、自分に合った場所を探して決めたいと思いました。 |
|--|

(3) 高等学校(学習プログラム例を活用して構想した教科における授業実践)

ア 教科「情報」における授業実践

手引では、学習指導要領におけるキャリア教育に関連する目標や内容は相当数に上ることが指摘され、その主なものが抜粋されている。このことから、生きることや働くことへの関心を高める題材が数多くあることがうかがえる。しかし、実際の教科指導においては、生きることや働くことに関する内容を直接的に取り扱わない場面もある。こうした場面において、キャリア発達にかかわる諸能力を身に付けさせるためのキャリア教育実践を、研修員が担当する教科「情報」の授業で提示することとした。

また、これまでの教科指導の視点に加えてキャリア教育の視点で授業を再構成することで、現在の学校教育に求められている生きる力の育成というねらいの達成にもつながると考えた。

以上を踏まえ、今回の授業では、教科指導及びキャリア教育という二本立ての構成を明確にした指導計画を作成し、実践することとした。

イ 学習プログラム例を活用した育成が期待される能力・態度の具体化

授業を構想するに当たり、キャリア教育の視点に基づいた育成が期待される能力・態度を、教科とは別に具体化する必要があると考えた。その際、学習プログラム例を活用した。

学習プログラム例には、『自己理解の深化と自己受容』が高校段階におけるキャリア発達課題の一つとして例示されている。この『自己理解の深化』を「社会の一員としての自己を明確に理解すること」ととらえ、「自己を客観的に評価できる

能力」と把握した。また、『自己受容』を「社会の一員としての自己を受け入れること」ととらえ、「自己評価に加えて自己に関する他者評価を受け入れられる能力」と把握した。

また、学習指導要領解説情報編には、『ただ単に制作だけで終わるのではなく、制作計画を立てること及び制作物の自己評価や生徒相互での評価を行うことが必要である。その際、生徒自らが評価項目を検討し、実際に評価し、その結果に基づき改善を図るように指導することが望ましい』と記されている。このうちの『生徒自らが評価項目を検討し、実際に評価し、その結果に基づき改善を図る』を「設定された評価項目に沿って自他を客観的に評価し、その評価結果に基づき改善を図ること」ととらえ、「自他の評価結果の違いを内省できる能力」と把握した。

以上から、育成が期待される能力・態度を「自他を客観的に評価するとともに、他者からの評価

を受け入れ、自己評価と他者評価の違いを内省できる能力」と具体化した（表10）。

ウ キャリア教育の視点に基づいた評価規準

教科における評価規準とは別に、キャリア教育の指導結果を評価するために、キャリア教育の視点に基づいた評価規準を設定した。

まず、設定した育成が期待される能力・態度が、4領域8能力の『自他の理解能力』と『選択能力』の内容に当てはまることを確認した上で、学習プログラム例に示されていた具体例を参考に、「様々な評価項目について比較検討し、自分自身で判断しようとしている」と「自他の作品を客観的に評価し、自他の評価結果の違いを内省しようとしている」を評価規準として二つ設定した。

エ 授業の概要

作成した学習指導案（資料8参照）を基に実施した授業の概要を表10に記す。

表10 授業の概要

教科	教科「情報」	科目	国際情報通信（学校設定科目）	単元	フレームを使おう
目標	インターネット社会に必要な基礎的・実践的能力の育成を図る。				
対象生徒	21名（2年生：2名、3年生：19名）				
視点	育成が期待される能力・態度	評価規準		観 点	評価方法
教科	習得した情報を主体的に活用できる能力	フレーム技術を主体的に活用しようとしている。		関心・意欲・態度	生徒に対するアンケート
キャリア教育	自他を客観的に評価するとともに、他者からの評価を受け入れ、自己評価と他者評価の違いを内省できる能力	様々な評価項目について比較検討し、自分自身で判断しようとしている。 自他の作品を客観的に評価し、自他の評価結果の違いを内省しようとしている。		意思決定能力（選択能力） 人間関係形成能力（自他の理解能力）	

オ 結果と考察

理論から実践に至る道筋を明らかにするために、キャリア教育を通じて育成する生徒像を明確化する構想段階から、設計・実施・評価のサイクルを研究の対象範囲として把握し、教科「情報」における授業実践を考察した。

教科の視点から考察すると、ポートフォリオを活用して過去の作品（先輩の作品）を参考にさせることにより、「過去の作品は参考になりましたか」の質問に対して、「たいへんなった」「なった」と回答した生徒が15名、「これまでに学習した技術をいかそうとしていますか」の質問に対して、「十分している」「している」と回答した生徒が

17名いた。このことから、フレーム技術を主体的に活用しようとしていることがうかがわれ、習得した情報を主体的に活用できる能力の伸長を促すことができたと考えた。

キャリア教育の視点から考察すると、「評価項目」について、「よくわかった」「だいたいわかった」と回答した生徒が18名、「自分自身で判断しようとしていますか」の質問に対して、「十分している」「している」と回答した生徒が16名いたことから、様々な評価項目について比較検討し、自分自身で判断しようとしていることがうかがわれた。また、「評価の方法」について、「よくわかった」「だいたいわかった」と回答した生徒が

16名、「客観的に評価しようとしていますか」の質問に対して、「十分している」「している」と回答した生徒が16名いた。自由記述には、「自己評価と他者評価のずれを意識することは、とても大切だと思いました」との感想が見られた。これらから、自他の作品を客観的に評価し、自他の評価結果の違いを意識しようとしていることがうかがわれた。設定した評価規準に照らし、自他を客観的に評価するとともに、他者からの評価を受け入れ、自己評価と他者評価の違いを内省できる能力の伸長を促すことができたと考えた。

以上から、教科指導において、学習プログラム例を活用して作成した教科の視点とキャリア教育の視点を盛り込んだ学習指導案による実践は、教科の目標の達成と、発達課題を考慮したキャリア発達にかかわる諸能力（自他の理解能力と選択能力）の伸長に有効であることが検証できた。

成果と課題

1 成果

協力校における実践により導かれた以下の三点から、キャリア教育の理論から各学校における実践に至る道筋を明らかにすることができたと考えられる。

実践マニュアル「理論編」を基に作成したキャリア教育啓発資料を活用した校内研修によって、キャリア教育に関する共通理解が深まるとともに、実践への意欲が高まった。

小学校における学習プログラム例を活用した校内研修によって、具体的なキャリア教育実践計画を作成することができた。また計画作成を通し、指導に関する共通理解と推進への見通しを得ることができた。

中学校及び高等学校における学習プログラム例を活用して構想した授業実践によって、教員は授業におけるキャリア教育の進め方に関する理解を深めることができた。また、生徒のキャリア発達を促す実践であることも検証され、キャリア教育の有効性を実感できた。

2 課題

実践に対しての評価方法の確立
各地の優れた実践に関する情報の共有化
研修機会の確保とリーダー養成
校種間の連携の在り方

まとめ

本研究において、キャリア教育の理論から協力校における実践に至る道筋を示すことを通し、これまでの実践をキャリア教育の視点から見直すことがキャリア教育の推進に結び付くという具体的な提案をすることができたと考える。

今後は、研究成果を適切に発信し、各学校における実践に結び付けていく必要がある。この他、評価方法の確立、キャリア教育推進の担い手となる人材の育成、校種間の連携の在り方等が、キャリア教育推進上の課題として挙げられる。これらの達成を期し、最終的には、児童生徒の全人的な成長を促すという教育の最大の目的を達成できるよう、キャリア教育に関する研究を深めていきたい。

<参考文献>

- ・中央教育審議会 『初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）』（平成11年）
- ・国立教育政策研究所 『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）』（平成14年）
- ・文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（報告書）』（平成16年）
- ・文部科学省 『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』（平成18年）
- ・神奈川県総合教育センター 『高等学校における教科でのキャリア教育推進のためのガイドブック』（平成19年）
- ・三村 隆男 著 『キャリア教育入門 その理論と実践のために』 実業之日本社（2004）
- ・亀井 浩明 鹿嶋 研之助 編著 『小中学校のキャリア教育実践プログラム』ぎょうせい（2006）
- ・児島 邦宏 三村 隆男 編 『小学校・キャリア教育のカリキュラムと展開案』 明治図書（2006）
- ・三村 隆男 編 『はじめる小学校キャリア教育』 実業之日本社（2004）